

源平布引滝 綿繰馬の段

出して走り行く。

音鎮まれば葵御前、太郎吉連れて立出で給ひ、

「聞き及びし実盛殿。お目にかゝるは初めて、段段のお情、忘れ置かし」

とありければ、

「これはく御挨拶。某もとは源氏の家臣、新院の御謀叛より思はずも平家に従ひ、清盛の祿を喰むといへども、旧恩は忘れず、今日の役目乞受けたも危きを救はんためしかるに不思議なはこの肘。矢橋の船中にて某が切落した覚えあり。たしかにこの手に白旗を持ちつらん。御存じなきや」

と尋ぬれば、

「なる程く。その旗も手に入りしが、その切つたとある者の年恰好は」

「ホウ年ごろは二十三四、背高く色白なる女。たしかに名は小まん」

と聞くより九郎助夫婦とも、

「ナウ、それはわしが娘の小まんぢや」

「まんぢや」

とうろたへ歎けば、御台もともに、

「さてこそそれよ」と骨身にこたへ、太郎吉はたとうろくくと訳も涙に暮れあたる。

九郎助は老いの一徹、息も涙もせぐりかけ、

「コレ実盛殿、娘が肘はなに科あつて切つたぞ。エ、むごたらしいことしやつたのふ。この娘にはノ六十にあまる親もあり、また七つになる子もあるぞや。よもや盗みも衒りもせまい。なに誤りでなに科で、サアサそれ聞かふく」

とせちがひかゝれば、女房も、

「ヲ、さぶぢやく、親父殿。骸はどこに捨てゝある。ついでにそれも聞いて下され」

「ヲ、それもナア、今ごろは犬の餌食。当座に死んだか生きてゐるか、サアありやうにいへ。いへ。いわぬか」

「情ぢやいふて下され」

と夫婦が泣き出す心根を、思ひやつて実盛。

「さてはその方達が娘よな。聞きもおよばん宗盛公、竹生島詣で下向の御船、勢田、唐崎の方へ漕ぎ出すところに、矢橋の方より二十あまりの女、口に白絹を引つくはへぬき手を切つてさくく」と、浮いつ沈みつ遊びくる。『アレ助けよ、アレ殺すな』と、舷叩いてあせれども、折柄比叡の山風柴舟の助けもなく、水に溺れる不憫さに、三間櫂を投込んで、念なう御船へ助け乗せ、『コリヤいかなるものぞ』と尋ぬるうち、追手と見えて声々に『その女こそ源氏方、白旗隠し持つたるぞ。奪ひ取れく』と呼ばはる声聞きしより、船に居合はす飛弾ノ左衛門飛びかゝつて『もぎ取らん』、『イヤ渡さじ』と女の一念。『もしや白旗平家へ渡らば、末代まで源氏は埋れ木。女が命にかえられず』と、白旗持たる肘をば、海へさんぶと切り落し、水底へ沈みしと、船を汀へ漕ぎ戻し、骸は陸へ上げ置きしが、廻り廻つてこのうちへ白旗もろとも帰りしは、親を慕ひ、子を慕ひ、流れ寄つたか不便や」

と涙交りの物語。聞くほど悲しく夫婦はせき上げ、

「道理で孫が目にかゝり、取つてくれとわんぱくも、虫が知らした親子の縁。三人かゝつて放さぬ白旗、心よう放したは、わが子に手柄させたさか。死んでもそれほど可愛いか。手にとどまつた一念がものいふことはならぬか」

と御台もろとも取りすがり、泣くよりほかのことぞなき。涙おさへて太郎吉はずつと立つて、

「ヤイ侍。ようかゝ様を殺したな」

とぐつと睨めたる恨みの眼、自然と実盛肝にこたへ、

「ホ、健気なりたくまじや。母が筐はソリヤそこに」

といふにかけ寄り肘を抱き、

「かゝ様呼んでこの手をば、骸へついで下され」

とあなたへ持ち行き、こなたへ頼み、身を投げ伏して泣きしづむ。かゝる歎きの折も

折、所の者ども死骸を持ち込み、

「ア、コレ〜この娘が切られてゐた。ガ肘がかたし紛失した。ほかはまんぞく渡します」

といひ捨てゝこそ立帰る。

「ヤレ太郎吉よ。かゝが顔これが見納め。見て置け」

といふに、かけ寄りいだきつき、

「コレなうかゝ様拝みます。無理もいふまい、いふこと聞かふ、ものいふて下され。祖父様詫び言して下さい」

と泣きこがるれば、

「ヤレ詫び言におよばふか。こつちよりあつちから、ものいひたうてなるまいけれど、この世の縁が切れてはナ、モ互ひに詞はかはされぬ。死骸のありかをどうぞまあ尋ねふかと思ふたれど、なまなかに持つて戻り、顔見せたらたまるまいと、そちがねるまで待つてゐた。エ男勝りな女であつたが、それが却つて身の怨となつて死ぬるか。可愛や」と悔み涙に、女房も

「さぞ死にしなにごなたやおれに、いひたいことがあつたである。太郎吉よ、水汲んで櫛の花で手向けてくれ」

「イヤ〜おりやいやぢや〜。かゝ様がものいはにや聞かぬ、〜」
とわんぱくも、

「ヲ、そればつかりが道理ぢや」

と思ひやるほどいぢらし。実盛始終手をこまねき、人々の愁歎に涙と浮かむ一工夫、思ひついで傍に立寄り、

「かく甲斐々々しき女、たとへ片腕切つたりとて即座に息も絶えまじきが、白旗を渡さじと一心腕に凝りかたまり、五臓に残る魂なし。再び肘を接合はさば、靈魂帰り息することもあらん。誠にかの眉間尺が首、二日二夜煮られても凝つたる一念、恨みを報ぜし例しもあり。今この肘に温りあるも不思議、または御旗の威徳も」

と切つたる肘に白旗持たせ、

「ものは試し」

と接合せば、わが子を慕ふ魂魄も御旗の徳にや立帰り、息吹返し目を開き、

「太郎吉どこにぞ。太郎吉」

とごふに、びつくり、

「ヤレ蘇生つたわごんにある。ごんに」

「ごんに」

と取継る。

「ナウ御台様。白旗はお手に入ったか。太郎吉にたった一言いひたいことが」

とばかりにて今ぞはかなくなりにつけり。

「ヤアコリヤ小まんやい〜」

「コレ小まんいナウ〜」

「ハア可愛や〜〜〜な。モウそれが遺言か。いひたいこととは、オ、合点ぢや、〜。そちが筋目の事である。イヤもうし、なにを隠しませうぞこの者は二人が中の娘でもござりませぬ。堅田の浦に捨て〜ござりました。ガコレ御覽して下さりませ。この懐に持つてをります用心合口、金刺といふ銘を刻りつけ、氏は平家何某が娘と、書付もござりますれば、もし親達が尋ねて来ふか。取返しにも来ふかと、そればかりを案じてゐて、今死なうとは〜存じませなんだ。生返つたがなほ思ひ、あんまりこれは胴慾な、ほい、ない別れ」

と取付いて『わつ』とばかりに泣きゐたり。ともに悲しむ葵御前。たゞならぬ身にせきのぼす、五臓の苦しみ御産の悩み、実盛驚き、

「ヤアコリヤ夫婦の者。泣いているところでなし。御台は産の悩みあり、いたはりもうせ」

と一間へ伴ふ間もなく、用意の屏風引廻し、お腰抱くやらはやめやら、祖父祖母が介抱に、心利いたる実盛がかの白旗を押立つれば、実にも源氏を守りの印。若君安々御誕生初声高く上げ給ふ。父義賢の稚名をすぐに用いて駒王丸、後に木曾ノ義仲と名乗り給ひし大將は、この若君のことなりし。九郎助歎きも打ち忘れ、

「お生れなされたいと様の、御家来にはこの太郎吉」

「ヲ、それ〜、かゝる目出たい折なれば、実盛様御取りなし」

と願へばうなづき、

「ヲ、幸ひ〜。死したる女の忠義を思へば、骸は灰になるとても、一心の凝りかたまりし肘、うかつには焼捨てがたし。その手をすぐに塚に築き、太郎吉が名を今日より、手塚ノ太郎光盛と名乗らせ、御誕生の若君木曾殿へ御奉公。すなはちこれが片腕のよい家来」

と披露する。御台は気色を改め給ひ、

「もつとも父は源氏なれども、母は平家某が娘と九郎助の物語。一家一門広い平家、もし清盛が落し子も知れず、まづ成人して一つの功を立てた上で」

と仰せに、実盛、

「ハ、ア御尤も至極々々。まづこの所にござあつて若君御誕生と聞えては一大事。義賢の御生国信州諏訪へ立越え、御家来権ノ頭兼任に預け御成人の後、再び義兵を挙げ給へ。九郎助夫婦御供」

とすゝめに任する表の方、いつの間にかは瀬尾ノ十郎、小柴垣より頭れ出で、

「ヤアそりやならぬ〜。かくあらんと思ひしゆゑ、死骸を持たせ窺ひ聞く。義賢が倅男子とあれば見遁しならず。いで受取らん」

と駈入れば、実盛やがて立ちふさがり、

「ア、これ／＼瀬尾。貴殿も生通しにもせまい。海とも山とも知れぬ水子、見逃しやるが武士の情」

「ヤアいふな実盛。さては汝二心な。平家の禄を喰んで源氏の胤を見逃す不忠。サぐつとでもいふて見よ。じたいこのくたばった女めが、白旗奪ひ取つたるゆゑ、平家方は夜が寝られず。思へば思へば重罪人め」

と死骸を立蹴にはつたと蹴飛ばし、

「サア生れたがきめ渡せ／＼。異議におよぶとなで切り」

と飛んでかゝるを太郎吉が、母の譲りの九寸五分抜くよりはやく瀬尾が脇腹ぐつと突いたる小腕の力。『これは』と人々驚くうち、

「ようかゝ様の死骸をば、踏んだな蹴つたな」

とえぐりくる／＼、さすがの瀬尾、急所の痛手にどつかと伏す。

「ヤレ出かしゃつた」

「出かしゃつた」

とほめそやしても、夫婦とも、後の難儀を思ひやり胸轟かすばかりなり。しばらくあつて瀬尾ノ十郎。

「なんと葵御前。これで太郎吉は駒王殿の御家来にサならふがの。平家譜代の侍、瀬尾ノ十郎兼氏を討ちとめた一つの功。成人を待たずとも、ノコレ召しつかはれて下さりませ。誠に思へば一昔、部屋住みの折から手廻りの女に懐胎させ、堅田の浦へ捨ておいたる平家のなにかしは某。まためぐり逢ふ印にと、相添え置きたるソレこの劍、廻りめぐりてわが体、あばらをかけて金刺となつたも孫めが不便さゆゑ。初めての御家来に平家の縁と嫌はれては、娘が未来の迷ひといひ、一生埋れる土百姓。七つの年から奉公せば、木曾の御内に一といふて二のなき家来。取りなし頼む実盛殿。サア瀬尾が首とつて、初奉公の手柄にせよ」

と非道に根強き侍も、孫に心も乱れ焼き。すらりと抜いてわが首へ、しつかと当て、両手をかけ、

「えい／＼／＼」

と引落す。難波瀬尾と平家でも悪に名高きその一人最期はさすが健気なり。夫婦も泣く／＼その首を太郎に持たせ御目見得。葵御前は若君抱き、

「初めての見参に平家に名高き侍を討取つたる高名、主従三世の奇縁ぞ」

と仰せを聞くより太郎はつつ立ち、

「サアこれからおれは侍。侍なればかゝ様の敵、実盛やらぬ」

と詰めかけたり。

「ホ、／＼、あつぱれ／＼。さりながら四十に近き某が、稚き汝に討たれなば情と知れて手柄になるまい。若君ともろともに信濃の国諏訪へ立越え、成人して義兵を挙げよ。その時実盛討手を乞受け、故郷へ帰る錦の袖ひるがへして討死せん。まづそれまではさば／＼。いづれもさらば。家来ども乗りがへ引け」

と呼ばはれば、『はつ』と答へて月びたひ、栗毛の駒を引出だす。手綱おつ取り乗るうちに、いづくに隠れぬたりけん、矢橋の仁惣太踊り出で、

「ヤア先だつて注進の褒美を無にしたそのかはり実盛が一心で駒王丸を北国へ下す段々直ぐに注進。詞つがふた争ふな」

といひ捨て、駈出す。実盛すかさず馬上より、用意の鑰繩打ちかくれば、首にかゝつてきり／＼／＼。引寄せ引上げ引掴み、

「あつぱれおのれは日本一の、大欲無道の曲者め」

と鞍の前輪へ押付けて、首かき切つて捨て／＼けり。その後手塚ノ太郎、母がかたみの小合口、金刺取つて腰にぼつ込み、綿繰馬にひらりと乗り、

「ヤア／＼実盛。かゝ様殺して逃ぐるかいぬか。もうおれが名は手塚ノ太郎、コリヤこの金刺の光盛なり。いなずとこで勝負々々」と呼ばはつたり、

「ヲ、出かした／＼。蛇は一寸にしてその氣を得る。自然と備はる軍の広言、成人して母の怨、顔見覚えて恨みを晴らせ」

「イヤ／＼もうし、孫めが大きうなるうちには、そこもと様は顔に皺、髪は白髪でその顔かはる」

「ム、ム、ム／＼、ハ／＼、なるほど、その時こそ鬢髭を墨に染め若やいで勝負を遂げん。坂東声の首取らば池の溜りで洗ふて見よ。軍の場所は北国篠原、加賀の国にて見参々々」

「げにその時にこの若が、恩を思ふて討たすまい」

「生きながらへてをつたらば、この親父めが御旗持」

「兵糧焚くはわたしが役」

「首切る役はこの手塚」

「ヲ、ヲ、互ひに馬上でむんずと組み、両馬が間に落つるとも、老武者の悲しさは、軍にしつかれ、風にちゞめる古木の力もおれん。その時手塚」

「合点々々」

「ついに首をかき落され、篠原の土となるとも名は北国の街に上げん。さらば」

「さらば」

と引別れ、帰るや駒の染手綱、隠れなかりし弓取りの名は末代に有明の、月もる家を後になし駒をはやめて立帰る。